

「病院の世紀の理論」

評者：いずみの病院事務部次長 伊藤 正

猪飼 周平●著

A5・頁 336

有斐閣

ISBN 978-4-641-17359-0

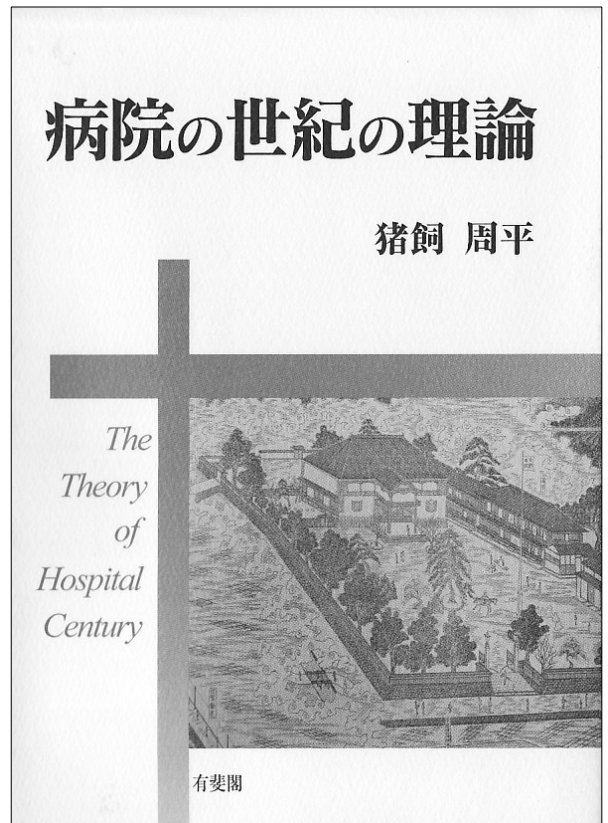
2010年4月刊

風変わりなタイトルの本である。単に「病院の世紀」ではなく「病院の世紀の理論」と、わざわざ「理論」と付けている。つまり、この本は「病院の世紀の理論」という名の新しい理論（パラダイム）のプレゼンテーションの本なのだ。では、その理論とは？
ここのところがうまく説明できないとブックレビューにならないので、以下、私なりに箇条書きでまとめてみる。

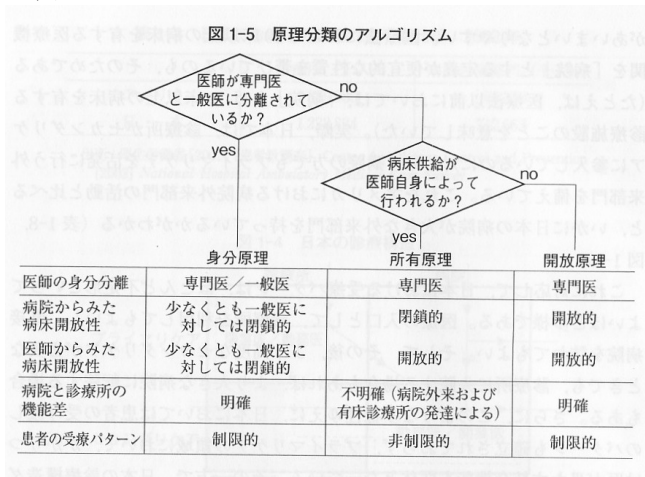
- ① 20世紀は病院の世紀である。
- ② 日本などはともかく、欧米では19世紀以前にも病院は存在した。だが、彼の地では富裕層は病気になると家庭医にかかり、決して病院に入院しようとはしなかった。病院が高度な治療機能の担い手としてすべての階層の入院・治療拠点へと変貌するのは19-20世紀転換期である。
- ③ 医療システムの主役として病院が君臨した時代。それが病院の世紀である。
- ④ 19-20世紀転換期において世界で同時に生成し、病院の世紀を特徴づける医療システムは、その医療供給原理の違いから次の3類型に分類される。
- ⑤ それは、身分原理型、所有原理型、開放原理型である（図表1~3参照）。
- ⑥ これら3原理は、各々の原理を採用する各国の診療構造をほぼ100年間にわたって強く規定してきた。
- ⑦ これまでわが国で一般医や開放病床のシステムが導入されなかったり、導入が限定的だったりは、この強い規定性ゆえである。
- ⑧ だが、21世紀のこんにち、病院の世紀はもはや過去のものとなりつつある。
- ⑨ そもそも病院の世紀を生み、支えたものは、治療および治療医学の急速な進歩と、それに対する人々の期待・信任の高まりである。
- ⑩ こうした背景の下、医療サービス供給の頂点として、医師の権威が確立した。
- ⑪ ところがこんにち、これまでのような治療・治療医学への「全幅の信頼」は揺らいでいる。治療=健康ではなく、QOLが重視されるようになり、医療モデルの一方に生活モデルというアプローチがあることが認識されるようになってきている。これにともない、医師の専門家としての絶対的優位性も相対化されつつある。
- ⑫ 病院の世紀の終焉後、医療システムはどこへ向かうのか？ わが国でさしあたりキーワードとして浮上しているのは包括ケアシステムである。
- ⑬ 現在の（1世紀ぶりの）転換期にあって、医療政策の構築の上で必要なのは、確固とした歴史観の上に立った長期的展望と、それに適合する制度設計に関するグランドデザインである。

さて、どうだろう。

このように見えてくると、昨今の痰吸引問題から特定看護師、ナースプラクティショナー（NP）の議論、さらには包括ケアシステム構想などなど、様々な事象が「病院の世紀の終焉」の景色として見えてこないだろうか？ このように、これからの医療システムを考える上で、なかなか示唆に富む本である。



図表 1



図表 2

表 1-9 3原理分類に基づく先進諸国の医療システムの分類（暫定）

原理	身分原理	所有原理	開放原理
国（地域）	イギリス、スペイン、ポルトガル、イタリア、フランス、ドイツ、オランダ、ベルギー、オーストリア、スイス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ	日本、韓国、台湾	アメリカ

図表 3

